

居酒屋

ほったくり

秋川滝美 Takimi Akikawa

6

目次

似て非なるもの………
241

路地裏の出来事………
193

釣り合わぬ恋………
147

町の本屋………
103

振り込め詐欺事件………
61

秋休みの花火大会………
5

秋休みの花火大会

お急ぎシンナカレー

鯖缶の梅和え

肉団子

鮭団子

季節の移り変わりがいささか遅刻気味なせいで、九月は夏だか秋だか判別がつけがたくなってきた。それでも十月も半ばを過ぎると風も熱を失い、あたりはすっかり秋色に染まる。

ようやく暑さが去ったことに安堵するとともに、夏の疲れが身体に忍び寄ってくるようなこの時期、東京下町にある居酒屋『ぼったくり』の引き戸には『休業のお知らせ』が貼り出される。

——誠に勝手ながら、十月八、九、十日は休業させていただきます。

『ぼったくり』の休みは週に一度、日曜日と決まっている。祝日と重なったところで、月曜日を休むわけではないので、連休という概念はない。

けれど年に一度だけ、『秋休み』と称して連休を取る。それは十月二週目、体育の日を含む三日間で、先代のころからの習わしだった。

引き戸に貼られた紙を見た常連たちは、ちよつとがっかりしながらも『今年も美音坊たちの命の洗濯の時期か……』なんて言ってくれる。

その期間を利用して旅行に出かけることもあれば、気力体力回復のためにひたすら家でだらけまくることもある。

美音が、妹の馨かおるに今年の予定を訊ねたところ、彼女は少し考えたあと『できれば哲てつくんと旅行に行きたいんだけど……』と答えた。ためらいがちに見えたのは、恋人と旅行に出かけたいのは山々だけれど、姉のことを考えるとちよつと……ということだろう。

美音は旅行の計画を立てるのが苦手だから、誰かに連れ出されでもしない限り旅行はしない。親しい友人がいなくてもいいが、彼女らの大半は恋人がいたり、夫や子どもがいたり、週末に誘うのは気が引ける。馨が哲と出かけるならば、美音は自動的に留守番ということになってしまうのだ。

ひとりで留守番するのは寂しい。でも、馨が恋人と旅行したいと思うのは当然だ。ふたりは先般、お墓の在り方を巡ってけんかをしたばかりだ。馨によれば、仲直りはしたものの、哲はけんかの際の理不尽な物言いについて恥じ入っているそうだ。きっと彼は、旅行は名誉挽回の絶好の機会とばかりに意気込んでいることだろう。

「私のことはいいから、どこへでも行ってらっしゃい」

「ありがとう、お姉ちゃん！ お土産いっぱい買ってくるね！」
「はいはい。その代わり、『お知らせ』の紙はあんたが作ってね」
「了解！ じゃあ早速」

元氣よく返事をした馨は即座にパソコンの前に座り、あつという間に『休業のお知らせ』を作り上げた。

+

十月が迫り、そろそろ『お知らせ』を貼らなくては……と思っていたある日曜日、旅行ガイドを捲っていた馨が話しかけてきた。

「お姉ちゃんは旅行しないの？」

「ひとりで？ それはちよつと……」

「誰もひとりで行けなんて言っていないでしょ」

「だって、友達はみんな……」

忙しいし、と続ける前に、馨はあまりにも遠慮のない言葉を投げってきた。

「ばっかじゃないの！ 要さんと決まってるでしょ」

「か、要さん？ なんで？」

美音は狼狽のあまり、素っ頓狂な声を上げてしまった。

つい先日、要とふたりでバーで呑んだあと、帰る足をなくして泊めてもらったことも、翌朝あった大事件も馨には告げていない。とてもじゃないけれど、照れくさくて言えなかったのだ。

だから馨が知っているわけがない。それとも、微妙に変わった雰囲気から何かを察したのだろうか……

あたふたしている美音に、馨は容赦ない質問をぶつけてくる。

「要さんと付き合ってるんでしょ？ いつから？」

「いつからって……まだ付き合い始めたばかりで……」

ついうっかり答えてしまった美音を見て、馨は目を弓形にして笑った。

「ふうん、やっぱり付き合い始めたんだ。よかったねえ、お姉ちゃん」

そのあと、おめでどう！ とハイタッチを要求される。手の平が立てたべちりという音を聞いて、思わず腰から力が抜けそうになった。

馨は確信など持っていないかったのだ。経験が浅く情報タダ漏れに近い姉に、カマをかけたにすぎなかった。

「あんたってカマかけが上手すぎ！」

「お姉ちゃんが引っかかりすぎなんだよ」

恨めしそうに睨んでも、馨はケラケラ笑っているだけ。馨に知られたら冷やかされたりして面倒くさい、しばらく隠しておきたい、という美音の思惑は木っ端微塵だった。

「じゃあ何の問題もないじゃない。要さんを旅行に誘いなよ」

「そんなことできるわけないでしょ！ 私はあんたほど恋愛スキルが高くないの！」

「お姉ちゃん、それはスキルとかいう問題じゃ……」

「うるさいわね!!」

「年に一度しかない秋休みだよ。世間様だつて三連休。あたしも出かけちゃうんだから、お姉ちゃんもどこかに連れてつてもらえばいいじゃない？ きつと要さんなら、すごいプラン立ててくれるよ〜」

やっぱり社会人になりたての哲くんとは甲斐性が違うでしょ！ とか羨ましそうに言われても、

美音は困惑するばかりだった。

普段から、とにかく要は忙しい。会社は週休二日だと聞いたことがあるが、たいてい土日のどちらか、ひどいときは両方とも仕事をしている。三連休があつたところで、実際に休める日が何日あるだろう。もしかしたらまた出張が入っているかもしれない。

「要さん、すごく忙しいから無理。普段の週末だつて全部休めたことなんてないみたいだし……連

休だからつて旅行とかありえない。それに今からじゃ宿も取れないし」

「とかいつて、本当はお姉ちゃんが言い出せないだけなんじゃないの？ 年に一度しかない、しかも付き合つて初めての連休なんだよ。なんとかしてくれと思うけどなあ……」

なんならあたしが訊いてみてあげようか？ とまで言われて、美音は絶叫した。

「やめてー!! 私が無理！ あらゆる意味で無理!! そこまで頑張れない！」

「何を？」

「何を……」

お姉様はいつたい何を頑張るおつもりかしらあ？ と答えるに答えられない質問を投げっぱなしにしたまま、馨はさつさと旅行ガイドに目を戻した。深追いは逆効果とでも思ったのかもしれない。それでいて、聞こえよがしに呟く。

「あの経験値マックスっぽい人が、お姉ちゃんみたいならばりの初心者相手なんて気の毒すぎる。要さん、かわいそー」

姉の睨むような眼差しを完全に無視して、馨はガイドを捲り続ける。美音は、同じ親から生まれたはずなのに、なんでこんなに両極端な姉妹になっちゃったの、と嘆きたくなった。足して二で割りたいと思つたところでもうにもならない。

でも……

美音は壁に貼られたカレンダーを見ながら、ちらりとと思う。

休みは三日ある。そのうちの一日ぐらい、要が休める日があるのではないか。

——日帰りなら、どこかに出かけられるかも……

けれど、そう考えたたん、いつかの要の言葉が蘇ってきた。

『おれはそんなに暇じゃない。君の店に行つたあと、戻って仕事したこともある』

その言葉を口にしたあと、要が『ぼったくり』に現れる頻度は変わらない。彼は今も、無理をして『ぼったくり』に来る時間を作っているのだ。

もしも三連休のうちの日でも休める日があるとしたら、彼にはゆっくり休んでもらいたい。どこかに連れ出して疲れさせるなんてもつてのほかだ。

要と付き合うようになってから、美音はさらにその思いを強くしていた。

+

「うーん。さすがに秋休み寸前……」

『本日のおすすめ』が書かれた紙を見ながら、獣医の茂先生がからからと笑った。

三連休が近づくと『ぼったくり』のメニューはより多彩になる。冷蔵庫の中にあるものを片っ端

から料理して出してしまうからだ。

在庫処分が目的だけに、値段はいつも以上に店名詐欺。言うなればそれは、休業のお詫び代わりに大盤振る舞いだった。そのせいで秋休み寸前の『ぼったくり』はネタ切れ状態、品書きはかなり寂しいことになってしまう。ところが茂先生は、そんな空っぽの『ぼったくり』に狙い澄ましたように現れる。それは、秋休み前の恒例行事だった。

「とかなんとか言っちゃって、茂先生のお目当ては、大盤振る舞いのあとの間に合わせだろ？」

そんな風にウメが冷やかすのもお約束である。

「いいじゃないか。俺は例の奴でビールをぐいっとやるのが好きなんだから」

茂先生はまったく応えていない口ぶりで宣言する。

「揚げたての鮭団子とビール！ これ以上の組み合わせはないね！」

茂先生は、年に一度しかありつけないからなあ、なんて期待いっぱい眼差しでおしぼりを使う。

「面倒ってほどでもないし、言ってくればいつでも作るのに」

あたしにだって作れるぐらいなんだから遠慮しないで、と馨に言われても、茂先生はいいや、と首を横に振った。

「そりゃあわかつてるよ。でも、あえてこの時期に『冷蔵庫が空っぽで、もうこれしか作れません！』みたいな感じで出てくるのがいんだよ」

「変な趣味だね、この先生は」

ウメは理解できない、という顔をするが、美音はなんとなく茂先生の気持ちがわかる。

いつでも食べられる、言えば作ってくれるとわかっている、そのシチュエーションでこそ食べたい料理というのがあるのだろう。

「まあいいじゃないか。という事で馨ちゃん、鮭団子、鮭団子！」

「はいはい、少々お待ちくださいー！」

洗い物をしていた馨は、濡れた手を拭き、乾物入れにしている棚から鮭缶を取り出した。すかさずウメが声をかけてくる。

「あーついでに……」

「わかってます。そちらは私が」

美音は片手を上げてウメの言葉を止め、冷蔵庫を開けた。

空っぽの冷蔵庫の真ん中に鎮座しているのは、鮭団子とともに出す、とある料理のために仕入れた豚挽肉だった。

「やっぱりちゃんと用意してくれてたんだねえ……」

ウメが嬉しそうに目を細めた。

「毎年のことですよのね」

豚挽肉を用意しておかないとウメはもちろん、茂先生までがつかりしてしまう。鮭団子と豚挽肉で作る肉団子は一緒に出てきてこそだ、なんて言うのである。ふたりがそろって落胆するのは見るに忍びなかった。

『ぼったくり』で、鮭の缶詰が使われることは滅多にない。というか頻繁に登場する缶詰はツナ缶くらいだ。それでも缶詰を常備しているのは、いわゆる緊急時対応である。店にいるときに災害に見舞われないとは限らない。備えあれば憂いなし、ということでは美音は自宅のみならず店にも缶詰をストックしているのだ。

マグロ、カツオ、イワシ……昨今、魚の缶詰は軒並み値上がりした。とりわけ鮭缶は価格高騰が著しく、生の鮭とほとんど変わらなくなってしまったのだ。同じような値段なら、煮物、焼き物、蒸し物、揚げ物……と何でもござれの生のほうが断然いい。

子どものころは身近だった鮭缶が、いつの間にか高嶺の花になってしまったことが美音は残念でならない。それでも美音は缶詰にされた鮭の味が好きだったので、常備している乾物類から鮭缶を外すことはなかった。

美音としては、鮭缶は少し温めて醤油を垂らしただけで食べるのが一番だ、と思っていたが、さすがにそれを店で出すわけにはいかない。せめても……と考えたのが鮭団子だったのだが、いつの



間にか鮭団子は秋休み直前の人気メニューとなっていた。紅白の縞に鮭のイラストの入った缶の蓋をばっかんと開け、馨は鮭をポウルに移した。

細かく刻んだ玉葱とつなぎの片栗粉、それに胡椒を少々。鮭缶はけっこう味がしつかりついているから塩は入れない。風味を出すために醤油を数滴入れたあと、馨はポウルの中身を箸でぐるぐるかき混ぜた。

馨の様子を横目で確認しつつ、美音は肉団子の支度を
する。

こちらは餃子の中身を作る場合と同じく、挽肉に生姜の絞り汁と塩胡椒、酒を入れ、全体を馴染ませるようにまぜる。挽肉の色が少し白っぽくなるぐらいまで混ぜたあと、鮭と同じようにみじん切りの玉葱、片栗粉を入れた。「馨、そっち終わった？ ソース頼める？」

「お任せあれ！」

元気に答えた馨が、小ぶりの鉢にマヨネーズとケチャツ

プを入れてかき混ぜ始めた。威勢はいいけれど、作業としてはただそれだけ。あつという間にオーロラソースが出来上がった。

——揚げ物をするのも楽しい季節になったわねえ……

一口大に丸めた鮭と豚挽肉を揚げ油に泳がせながら、美音は気温の変化を実感する。夏の盛りは揚げ物も大変だ。エアコンが効いていてもおかまいなしに汗が滲み出る。それに比べれば秋や冬の揚げ物は楽勝、むしろ温まって嬉しいぐらいだった。

「お待ちせしました。熱々をどうぞ！」

二人分の揚げ物は、大した時間もかからずに出来上がった。

平皿に二種類の団子を盛り、カウンター越しに茂先生とウメの前に置く。すかさずカウンターから出ていった馨が、ふたりの後ろからオーロラソースと塩胡椒の小皿を出した。

「ソースはお好みで」

「待ってました！ 馨ちゃん、ビール、ビール！」

「はいー！」

「あ、馨、黒ビールがあるからそれをお出しして」

了解！ と言いながら馨が取り出した瓶を見て、茂先生の顔がさらにほころんだ。

『ブラウンポーター』！これはいいな！

『ブラウンポーター』は神奈川県にあるサントガーレン有限会社の製品である。下面発酵製法のラガービールが主流と言われるビール業界に、上面発酵製法のエールビールの美味しさを広めたいという思いから、一九九三年からサンフランシスコでビールの醸造と販売を開始。六本木のカフェでの逆輸入販売を経て一九九七年に国内醸造所を建造した。ちなみに『サントガーレン』という社名はスイスにある世界最古のビール醸造所と言われる『サント・ガレン修道院』に由来している。夏の暑さと乾きの中、ラガービールの軽くてすっきりした味わいはとても人気が高い。夏ばかりではなく、一年を通じてラガービールを愛好する人も多いだろう。

けれど、秋が深まり、よく冷えたビールのありがたみが少々薄れ始めるころになると、黒ビールのほろ苦さの中に潜むコクと甘みが嬉しくなってくる。黒ビールの真価をよく知っている茂先生が大喜びするのは当然だった。

すぐに馨がビールを運び、茂先生のグラスに注ぐ。夜の闇を思わせる濃い褐色は麦芽をしっかりと焦がす製法ならではのものです。口に含むとエールビール独特の甘みとチョコレートに似た香り、そして微かな苦みを感じる。茂先生は、その甘みと苦みの絶妙なバランスを楽しみつつ、鮭団子に箸を伸ばした。

オーロラソースをちょっとつけて口に放り込み、熱さに驚いたようにまた一口『ブラウンポ

ーター』を呑む。数秒後、茂先生が感極まった声を上げた。

「うまいっ!!」

そして茂先生は、どこにでもある普通の鮭缶なんだけどなあ……と毎年恒例となっている台詞を口にする。さらに、揚げたての鮭団子と黒ビール、これ以上の極楽はないよ……なんて言って呻いた。一方ウメは、極楽気分の茂先生の隣で塩胡椒をつけた肉団子を口に運んでいる。

「あ……元気が出る味だねえ。あたしはハンバーグよりもこっちのほうが好きだよ」

いつもの焼酎の梅割りをぐびりとやって、ウメも満面の笑みを浮かべた。

「鮭団子ねえ。こればかりは缶詰で作るほうが美味しいから不思議よね。大抵の魚は生のほうが断然美味しいのに」

美音が首を傾げながら言うと、馨も大きく頷いて同意する。

「挽肉にしても油で揚げちゃったらくどくなりそうな気がするけど、ハンバーグより軽く感じちゃうのは不思議だよねー」

「それは別に不思議じゃないですよ。ハンバーグにはたっぷり挽肉を使うし、つなぎにパンを入れたりするからポリウムが出るのは当然よ」

「そっか。ま、どっちにしても、これでうちの秋休みの準備は完了！」

空っぽに近くなった冷蔵庫や乾物入れを見て、馨がそう宣言した。

「十月にまとまったお休みがあると助かるわねえ……」

「遊びに行くのにもいい季節だしね！」

美音がしみじみ呟いた声に、馨が元氣いっぱい同意した。

「あんたはもう、頭の中が遊びでいっぱいなのね」

「そりゃそうだよ。だって、年に一度の連休なんだよ」

ここぞとばかりに遊ばないと！と馨は意気込んでいる。ウメがやれやれ……と呆れた調子で美音に話しかけてきた。

「乾物かんぶつばかりじゃなくて防災用品を確認して入れ替えるにしても格好の季節だね」

「水とか薬でも、使おうと思ったら期限が切れてたつてこと、けっこうありますからね」

「気候がいいから動きやすく掃除もしやすい。大物を洗うのもおすすだね」

少し動いただけで汗が滲にじむ季節が去り、木枯らしが吹き始めるにはまだ間がある十月は、大物洗濯にもってこいの季節だ。空気が乾いているからカーテンなどを洗濯してもすぐ乾くし、窓ふきや網戸洗いもしやすい。夏ほど日差しが強くないから虫干しにも適しているだろう。

今年は何とで留守番になるし、いっそ大掃除もしてしまおうか。掃除と料理なら断然料理のほうが好きだけど、暇に飽あかせてのんびりお掃除、というのはいかにも自分らしい。よく晴れて気持

ちのいいお天気だったら、だけ……

微妙に逃げ道を残しつつ、美音がそんなことを考えていると、また馨の声がした。

「そういえば家の災害対策用品も確認しなきゃね」

「家のはもうやったわよ。台所の隅に入れ替え済みの缶詰が積んであるでしょ。気がつかなかったの？」

「あれ……そうだった？」

馨は眉を寄せて天井を見上げている。どうやら家の台所を思い出そうとしているらしい。

けっこうたくさんあったのに、あれに気がつかないなんて……と美音は呆れてしまった。馨の心はもう秋休み一直線、旅行情報以外目にも耳にも入らないのかもしれない。

まったくこの子は……と馨を睨にらんでいる美音を見て、茂先生が吹き出した。

「おー怖い。美音ちゃんは、そういうところ、ほんとにきっちりしてるからなあ」

そんな茂先生を諷いざなめるようにウメは言う。

「大事なことだよ。備えあれば憂うれいなしって昔から言うけど、備えだって、一度備えてそれきりにしておいたんじゃ意味ないからね。いざつてときに期限切ればかりじゃどうにもならないよ」

災害対策用品の点検や入れ替えは、防災の日に合わせておこなうことが奨励しょうれいされているらしい。だが、実際にやっている人はどれくらいいるのだろうか。

残暑も真つ盛りの九月一日、美音はとてもじゃないがそんな仕事をする気になれない。それでもやはり点検は必要、ということで美音は秋休みに合わせて常備食材の入れ替えをおこなってきたのだ。

「そうだなあ……。災害対策は必要だってわかってるから一通り買いそろえてみたけど、押し入れにしまい込んだままって人が多いかもな」

茂先生はどうやら思い当たる節があるようだ。ウメは横目で茂先生を見ながら言う。

「茂先生みたいな獣医さんのところでしつかり備えておいてくれないと、町内の犬猫がみんな困っちゃうよ。うちのクロだってさ」

ちよつと待って。さすがに自分が飼っている猫の餌ぐらいは用意しておかないとだめでしょう。獣医さん任せじゃ、いくら茂先生だって大変すぎる。

やんわりと意見を述べる美音に、ウメは、そういうことじゃなくてさ……と続けた。

「飼い主が一緒にいるならいいよ。でも、大きな災害のときは、飼い主とはぐれるペットがけつこいうるじゃないか。うちのクロだって、どうなるかわかったもんじゃない。そういうときの頼みの綱は、やつぱり茂先生ってことにならないかい？」

次になんかあつたら、あたしみたいな年寄りはどうなるかわからない。独り住まいだから家の下で潰れても気付いてくれる人もいないだろうし……と、ウメはいつもの彼女らしくない、ちよつ

と弱気な発言をした。

あたしはともかく、クロだけはなんとかしてやらないと……なんてしんみり言われて、美音はどう答えていいかわからなくなった。馨も返事に困っている。

だが当の茂先生は至って呑気に答えた。

「クロもウメさんも心配ないよ。この町にいれば大丈夫」

「この町にいれば……。なんでさ？ きつとみんな、自分たちのことで精一杯になっちゃう。それを責めてるわけじゃないんだよ。そんなの当たり前のことだからさ……」

そんなこんなも含めて、好きで独りで暮らしてるあたしの自己責任ってやつだし、とウメは消え入りそうな声で呟く。ウメの言葉を聞いて、美音はやつと言葉を見つけた。

「ウメさん……それは違うと思うわ」

「違うないんだよ、美音坊」

遮二無二首を横に振るウメを見て、美音は勢い込んで言った。

「絶対違うわ！ だってここにはすぐくしつかりした町内会があるでしょ！」

ここぞとばかり、馨も加勢する。

「そうだよ！ 東日本大震災のとき、ヒロシさんすごかったじゃない。自分の家そつちのけで、町内回ってみんなが無事かどうか確認してたでしょ？ あとで聞いたけど、ヒロシさん、揺れが治まっ

て一番に住民リストを探したんだって」

「そういえばそうだった……とみんなが馨の言葉に頷いた。

『ぼったくり』がある町内会には、緊急時用の住民リストがある。

個人情報云々と喧しいご時世、自分の家に何人住んでいるかといった情報すら町内会に知らせない住民も多いらしい。だが、この町内に限ってはどの家にどれだけの人が住んでいて、どういふことをやっているかぐらいはちゃんと把握されている。開けっぴろげな性格の人間が多いからこそその風通しの良さだった。

ともあれ、この町内には緊急時用の住民リストがあり、代々町内会長に引き継がれている。半年に一度、町内会費の集金ついでに確認するので、実状から大きく離れることもない。

地震や台風などの大きな災害があつたとき、住民の安否を確認することは町内会長の重要な役割とされている。

東日本大震災のときも、余震が続く中、ヒロシは住民リストを片手に町内を走り回つた。その際、最優先とされたのは独り暮らしの住民だった。幸いみんな無事だったけれど、もしもひとりで被害に遭つていた人がいたとしても、誰も気がつかないなんてことはあり得ない――

「だからウメさんは大丈夫。もちろん、クロちゃんも」

それにソウタさんやカナコさんも近くにいるんだし、きつとすぐに駆けつけてくれますよ、と息

子夫婦の名を出し、ウメを安心させるように美音は笑つた。さらに茂先生が発破をかける。

「第一な、おつきな災害とかあつたら、若いもんなんて縮み上がつて動けなくなるかもしれない。そんなときこそ年寄りの出番だ！ まあ、ウメさんのことだから、そんなときは背筋しやきーって伸ばしてあちこち仕切りまくると思うけどね」

「そうそう。私たちみたいに経験が足りない者は、どうしていいかわからなくなっちゃいそうですから、よろしくお願いしますね！」

美音の言葉に、ウメはようやく頷いた。

「そうか。じゃあ、クロのためにも、町内の若いもののためにも、緊張とするかね」

「まあ、うちも近隣の動物クリニックも、飼い主とはぐれた動物たちをしばらく賄えるぐらいのものは用意してるから、そっちも少しは安心してくれていいよ」

「人間の分もお願いできないかねえ」

「あーそれは、どっちかっていうと『ぼったくり』の仕事だな。緊急炊き出しで美音ちゃんの飯が出てきたら、そりゃあみんな元気出るだろうよ」

「そうか！ それは腕の見せどころだね！」

馨の嬉々とした声を聞いて、美音は思わず眉を寄せてしまう。

「馨……あんたって本当に脳天気ね。緊急炊き出しってことは、ろくな材料もないってことなのよ。」

皆さんに満足していただけるようなお料理が、どれだけ作れるかしら……」

大きな料理屋さんならともかく、『ぼったくり』の冷蔵庫に収まる食材なんてたかがしれている。酒を冷やす冷蔵庫は大きくても、食材を入れている冷蔵庫は家庭用よりも少し大きい程度のものしかなかった。近くに八百源やちゅうげんや魚辰うまぢん、加藤精肉店かとうせいにくてんといった生鮮食品を扱う店があり、必要な食材を毎日納めにきてくれるので営業に支障はないが、『ぼったくり』の冷蔵庫は食材の宝庫とは言いがたいのだ。

「そうか。いくら美音坊でも、ない袖は振れねえってことか……」

「そういうことです。まあ、冷蔵庫が空になるまでは頑張りますけどね」

「それじゃあ、今と同じ状態じゃないか。冷蔵庫は空っぽ、あるのは……」

ウメはちらっとカウンターの奥に目を走らせた。視線の先にあるのは先ほど鮭缶を取り出した乾物ぼつ入れだった。そこにはまだいくつかの缶詰が残っている。賞味期限まで間があるものを使い切る必要はないからだ。

「缶詰か……」

茂先生が、それならうちにもあるなあ……と言いながら首くびをがつくり垂れた。

「しょうがないから、みんなで缶詰持ち寄って、ここで宴会でもしようかね。お酒ならいっぱいあるし」

ウメの言葉に茂先生はさらにとほほ全開の表情になる。

「美音坊の選りすぐりの酒に缶詰……」

「お言葉だけど茂先生、あんたの目の前にあるのも缶詰じゃないのかい？」

「あ……」

茂先生ははつと顔を上げて皿の上を見る。そこにはさつき美音が揚げたばかりの鮭団子さけだんじがあった。「そうか……。学生の宴会じゃあるまいし、缶詰をそのまま食うことはないんだよな」

「別にそのまま食べたってかまやしないよ。昨今の缶詰は随分よくなったそうだし。でもちよいとばかり目先を変えるつてもあり。それこそ美音坊の腕の見せどころだね」

「うわー、どうするお姉ちゃん、もつとハードルが上がっちゃったよ！」

口ではそんなことを言いながら、馨はけっこう面白がっている。おそろく自分には関係ない、料理を工夫するのは姉の仕事、とでも思っているのだろう。

やれやれ……と思いつつ美音は乾物入れを覗き込む。期待に込めて——というわけではないけれど、そろそろ次の料理を出す頃合いだ。

ちよつと考えたあと、美音が開けたのは鯖さばの水煮みず缶だった。汁気を切ってポウルに移し、細かく崩しながら馨に声をかける。

「馨、梅干しを潰しておいて」

「はいはい！」

馨はふたつ返事で壺から梅干しを取り出し、早速包丁で叩き始めた。冷蔵庫に残っていた長ネギを千切りにし、水にさらしたところで梅干しの用意も完了。

潰した梅干しを白出汁しろだしでのばし、醤油しょうゆを一垂らし。あとはネギと崩した鯖さばをあえれば、鯖缶の梅和えあの出来上がりだった。

「これは……ビールより酒だな！」

「ご名答です。さて、馨、お酒は……？」

そう言いながら、美音は挑むように馨を見た。

「おっ！ 今度は馨ちゃんのお手並み拝見か！」

茂先生は、馨が日本酒について勉強を始めたことを知っているらしい。おそらくシンゾウあたりから聞いたのだろう。

馨は、うっ……と小さく呻うめいたあと、日本酒が入っている冷蔵庫の前にかがみ込んだ。

「抜き打ちテストとは厳しいね、美音坊」

ウメがにやにやしながら見守る中、馨はようやく一本の酒を選び出した。

「よし、これだ！」

えいやつとばかりに馨が取り出したのは『信濃錦しなのにしき 純米 かかしラベル』、長野県伊那市いなしにある

宮島酒店みやじまかいてん

が造る酒だった。

宮島酒店は『美味と安心』を理念にし、すべての酒に無農薬あるいは低

農薬で栽培された酒造好適米を使い、濃厚かつ芳醇ほうじゆん、米の旨味をしっかりと生かした味わいの酒を造っている。中でも『信濃錦 純米 かかしラベル』は力強いコクと、米の旨味を包み込む適度な酸味

を持つ酒である。

酒瓶を持ったままこちらを窺うかがっている馨に、美音はにっこり微笑んだ。

「茂先生、召し上がってみてください」

早く注つぎなさい、とばかりにグラスと研まを用意する。それは美音の『合格』の証あかしだった。

詰めていた息をフーツと吐き出し、馨は嬉しそうに酒を注ぐ。

目の前に出されるのを待ちかねたように茂先生はグラスに口をつけ、続いて鯖缶の梅和えを一

口……

「これはさっぱりしていいな。ネギの食感もしゃきしゃきしてるし……何よりこの酒、キレがす

ごい！ この料理にぴったりだ！」

「でしょー！ 絶対合うと思ったんだ！」

馨は得意満面で鼻を膨ふくませる。本当はこの酒はさっぱりしていようと、濃厚であろうと、どんな味わいの肴さかなであっても合わせられる。鯖缶の梅和えだって、実を言えばビールにもぴったりの肴

なのだ。でも、わざわざそんなことを告げて馨をがっかりさせる必要などなかった。

鯖缶の梅和えは普段の品書きはおろか、本日のおすすめにだって入っていない。その場で突発的に作った肴に合う酒を選ぶのは大変だ。いつだったかのデビュー戦で『春らしい酒』という注文を受けたときのように、ラベルや美音が並べておいた酒瓶の順番を参考にするわけにはいかない。それでもなんとか酒を選ぶことができた。しかも、その酒を茂先生は『びつたりだ』と評した。そのことが、美音はとても嬉しかった。

「偉いねえ、馨ちゃん。日進月歩だ」

「へへ……ありがと、ウメさん」

ウメからも褒められて、馨はさらに嬉しそうに笑う。そして、ウメのグラスに目をやり、焼酎の梅割りがほとんどなくなっていることに気付いた。

「お姉ちゃん、ご飯のおかずにできそうなものを作ってあげてよ」

それ、二杯目だからそろそろ締めにしたいよね？ と確認され、ウメはこっくり頷いた。

「ありがと、ちょうど考えてたよ」

ではでは……とばかりに美音が取り上げたのは、フレーク状のツナ缶だった。

みじん切りにした玉葱をフライパンで炒め、軽く油を切ったツナ缶を投入。ささつと炒めたあと、ケチャップとカレー粉、最後に塩胡椒で味を調える。店中に広がるカレー粉の香りに、ウメがうん……と唸った。

「はい、『お急ぎツナカレー』完成です。ご飯でもパンでもOKですけど……」

「ご飯、ご飯ー！」

「ですよね」

ウメの胃袋に合わせた小盛りのご飯に、炒め上がったツナカレーを添える。ゴクリと生唾を呑み込んだ茂先生には、これまた乾物入れから出したクラッカーを添えて出す。

ふたりは早速、それぞれの皿を攻略し始めた。

「カレーって鍋で作るもんだと思ってたよ」

「いやいや、本場のカレーはこんな奴のほうが多いぞ」

和気藹々と会話を交わしながら、カウンターのふたりは皿を空にした。

「ごちそうさん。いや、意外な料理をありがとう。『ぼったくり』の底力を見たよ。万が一、災害に見舞われることがあったらみんなにも是非……」

「そんな機会なくていいよー！」

「だよなー!!」

炊き出しに忙殺される自分たちを想像して馨が上げた悲鳴に、豪快な笑い声がわき起こった。

「じゃあ、お姉ちゃん、行ってきまーす！」

元気な挨拶を済ませ、馨が出かけていったのは秋休み初日、土曜日の朝八時ちょうどだった。哲と馨は目的地を関西に定めたいらしい。二泊三日の旅ということで、お目当てはいくつかあるようだが、その最たるものは近頃大人気の某テーマパークである。

馨は、とあるファンタジー映画の大ファンで、是非ともそのアトラクションを体験してみたいと意気込んでいた。お土産楽しみにしててね！ とにやにやしながら言ったところをみると、不思議な味のキャンディーでも買ってくるつもりなのかもしれない。

馨はガイドブックをひっくり返しながら、気になるページに付箋を貼りまくっていた。ちらっと覗いてみたら大阪、京都、奈良、そして神戸……と地域はばらばら。あれではさぞやスケジュールを立てるのが大変だろうと思ったけれど、本人は至って楽しそうにしていたから美音がどうこう言う筋合いでもない。

玄関先で、気をつけて、と見送ったあと、美音はやれやれと居間に戻った。

丸々三日もひとりぼっちなんて、馨の卒業旅行以来である。あのときは店を休まなかったから、商店街の人たちや店に来る客と言葉を交わすことができたが、今回はそれすらない。

いつもの日曜日なら、今ごろは馨とふたりで家事に勤しんでいる時分だ。このシャツはどれぐら

いの温度でアイロンを掛ければいいのかと訊ねられたり、こっちのジーンズは裾がすり切れてきたからそろそろ新しいものを買ったほうが良いと提案されたり、洗濯ひとつとっても黙ったままでは終わらないのだ。

いつもの家事を黙々とこなしながら、もしかしたら声の出し方を忘れてしまうかも……と妙な不安を覚える。美音は、まさかね、と苦笑し、まずは図書館に出かけることにした。

ずらりと本が並んだ棚の間をいったりきたりして、お酒や料理の本はもちろん、読んでみたかった小説や写真集まで含めて限度冊数いっぱいまで借り出した。けっこう時間がかったように感じたけれど、図書館にいたのは一時間少々、まだお昼にもなっていない。

料理の本をばらばら捲ったり、気になったお酒をインターネットで調べたりしてみても時間は全然過ぎていかなかった。

—— いったい何をしよう。近頃この町内で話題となっているショッピングモール——『ショッピングプラザ下町』はまだオープンしていない。十日の月曜日に開業する予定だけれど、初日はすごい人だろう。とてもじゃないが出かける気にはなれない。いっそウメさんの家に行って、猫のクロとでも遊ばせてもらおうか。でもウメさんだって予定がないとは限らない。息子のソウタさん一家と過ごすかもしれない……

携帯電話が着信を告げたのは、美音がそんなことを考えていたときだった。

ディスプレイに『要さん』の文字が躍^{もど}っている。

「はい」

忙しいと言っていたのに、お昼にもならない時間に電話をくれるなんて……と嬉しく思いながら、美音は通話ボタンを押した。

「君は、いったいおれを何だと思ってるの？」

不満たっぷりの方が耳に飛び込んできて、美音は思わず言葉に詰まる。しかも、要がこんな風に挨拶も抜きで唐突に話を始めるなんて、今までにないことだった。

「え……？」

「まったくもう……」

深いため息が電話越しに聞こえ、美音はさらに困惑する。

「今日から秋休みなんだって？」

「なんで知ってるんですか!？」

要には伝えなかった。引き戸に貼られたお知らせの紙も見えていないはずだ。なぜなら、要が来るような時間になる前に、美音がこっそり剥^はがしていたからだ。

馨にお知らせの紙を作らせた翌日、『ぼったくり』に現れた要は、この三連休は全部出勤だ、と嘆いた。

要の勤める会社は、『ショッピングプラザ下町』の建設に関わっており、要はまさにその担当者のひとり。メンテナンスは、オープンイベントが終わったあと、要の会社のサービス部門に引き継がれるそうだが、この三連休の間はまだ要の担当となっていて、不具合に備えて待機していなければならぬらしい。加えて、三連休明けの火曜日には他の現場で打ち合わせがある、けっこう遠い現場だから月曜日から泊まりがけで行かなければならないとも……

その話を聞いた時点で、美音は、日帰りぐらいならなんとか、という密かな願望を諦めた。せっかくの三連休、彼に会いたいし、顔も見られないとなったら寂しいとも思う。けれど、要のことだから、美音が連休をひとりで過ごすこと知ったら、申し訳ないと思いかねない。なんとか時間を空けようと我武者羅^{がむしゃら}に働くかもしれない。ただでさえ大変な思いをしている人に、今以上に無理はさせられない。

そんなわけで美音は、『ぼったくり』の秋休みについて要に告げるのをやめた。ひとりで過ごす寂しさよりも、要への心配、そしてわがままを言って嫌われたくないという気持ちのほうが大きかった。

いつも遅い時間にやってくる要は、誰かと相客になる可能性は低い。気をつけて見ていたけれど、SNS上の『ぼったくりネット』でも休業の話題は出ていなかった。あの貼り紙を見ていない要が、『ぼったくり』の秋休みに気付くはずがなかった。

電話口からため息まじりの声が聞こえてきた。

「馨さんが連絡くれたよ。『お姉ちゃん、暇してますよ！』って」

「あの子ってばー!!」

「で、なんでおれはそれを君からじゃなくて、馨さんから聞かなきゃならないわけ？ おれと一緒はどこか行くとか、何かをしようとかがいう考えは全然なかったの？」

「だって、忙しいって言ってたじゃないですか！ 三日間会社に待機で月曜の夜から出張なんですよ？」

「そんなものなんでも……」

「だめです！ そう言うのがわかってたから……」

「だから、知らせなかったの？」

せっかく要のことを心配して知らせないようにしたのに馨にばらされるなんて、しかもこんなに怒るなんて想定外もいいところだ。だが実際に彼はとても怒っているし、怒らせたのは自分なのだろう。

「ごめんなさい……」

「頭に来た」

「要さん……」

「悪いと思ってるの？」

「思ってます」

細切れに肯定した言葉に『せっかく要さんのことを心配したのに……』という不満の色がわずかに滲んだらしい。電話越しに、さらに深いため息が聞こえてきた。

「今どこ？ 家にいるんだよね？」

「はい」

「今から仕事をなんとかする。一時間で迎えに行くから」

「だめですってば!」

「問答無用。せいぜいお洒落して待ってて」

「無理です!」

「どっちが？ おれと出かけるのが嫌なの？ それともお洒落が？」

「お洒落!」

要と出かけるのが嫌なわけがなかった。ただそのためにお洒落をしると言われても、美音にそんなノウハウはない。いつもアドバイスをくれる馨はとつくに出かけてしまった。

「おれと出かけるのが嫌なんじゃないんだね？」

「当たり前じゃないですか!」

「ならよかった。いいよ、普通で。ただの意地悪だから」

要は言い捨て上等とばかりに電話を切った。

そんなことを正面切って言うなんてあり得ない。あまりのことに、美音は啞然としてしまった。そして数分後、はっと我に返る。

—— 要さん、迎えに来るって言ったよね？ お洒落なんて無理とは言ったけど、やっぱりこのままってわけにはいかないよ。一時間で迎えに行くって、一時間後に会社を出るってこと？ それとも一時間後にこっちに着くの？ どっちにしても時間がない！

それからの時間は飛ぶように過ぎていった。さっきまで全然進まなかった時計の針が嘘みたいに回る。ワードローブをひっくり返して服を選び、靴や鞆を決めるだけで一時間もかかった。何やってるの私！ と泣きそうになりながら、化粧もいつもよりも念入りにする。鏡を覗いて、これってどうなの……？ と思っていたとき、外から車のエンジン音が聞こえてきた。

通りに面した窓から覗くと、見覚えのある車が止まっている。オープントースターを買いに行ったときに乗せてもらったのと同じ車だし、中から降りてきたのも見覚えのある男だった。

「お待たせしました」

慌てて外に出てみると、要は美音の家を見上げているところだった。

「ふーん……」

「なんですか？」

「いや、いかにも君たちらしい家だなあとと思って」

こちんまりして温かそうな家だ、と要は言った。怒ったような声ではなかったことに安心したものの、そうなる今度は別のことが気になつてくる。要はなぜ美音の自宅を知っていたのだろう。

「よく……」

「馨さん」

「え？」

「よく家の場所がわかりましたね……って言おうとしてたんだろ？」

「あ、はい、そのとおりです」

「それも馨さんが教えてくれた。おれは君を、お袋の家にも、自分の部屋にも連れていったのに、君は家まで送らせてくれさえしない。場所すら教えようとしなないんだからね、おれって随分かわいそうだ」

「だってそれは!!」

そんなの申し訳なさすぎるから……

要は、大抵は『ぼったくり』に来たあとも仕事に戻ると言っていた。店を閉めて片付けて、その

あと家に送ってもらおうとしたら何時になるかわからない。

顔を見せてくれただけで美音は十分嬉しいのだから、少しでも早く帰って仕事を済ませ、ゆっくり休んでほしいと願っていたのだ。その思いがちつとも伝わっていなかったことばかりして、美音はすっかり俯いてしまった。

ところが、なぜか頭の上からくつくつくつ……という鳩みたいな声が聞こえる。怪訝けげんに思って顔を上げた美音は、要が笑いこけていることに気付いた。

「なんで笑ってるんですか！」

「いや、ごめん。からかい甲斐があるなあと思って」

目の前でふんふん怒っている美音を見ながら、要はそれまで感じていた怒りのようなものが、すっかり溶けてしまったことに気付いた。

彼女の妹が、今日から『ぼったくり』は三連休になる、自分は旅行に出かけるから姉をよろしくとメールで連絡してきたとき、最初に感じたのは苛立ち、続いて落胆だった。

三日間、しかも年に一度きりの連休だというのに、彼女にはおれと過ごすという選択肢が全くないのかと思ったら、怒りよりも哀しみが湧いた。

けれどその感情はすぐにまた色を変えた。彼女は、おれが仕事に忙殺されていることをよく知っ

ている。彼女が連休になることを告げなかったのは、残業や休日出勤など当たり前になっている自分を心配しているからに違いない。

以前から『ショッピングプラザ下町』のオーブンに備えて三連休は会社待機だと散々嘆いていたし、その後の出張予定も知らせていた。そんな状況で彼女が、自分のために仕事の予定を変えてくれないなんて、言えるはずがない。彼女のことだから、それを言えばおれがどんな無理をするか考えるだろうし、その想像は当たっている。

彼女はいつでもおれの心配をしている。それは付き合い出す前からずっと同じで、まるで母親か何かのように、食事の中身から仕事の量、果ては休日の過ごし方まで心配の種は尽きない。

心配が高じて、一緒に過ごすよりもおれの仕事や休息を優先させようとする彼女は、あまりにも普通の恋人の概念からは遠い。

だがそれが煩わづらわしいかと言えそうではない。常々ありがたいと思っているのだ。それが彼女の性格だし、彼女がそういう形でしか自分の想いを表せないことぐらいちゃんとわかっている。それでも、その配慮がこんな形で出てしまうのはやっぱり切なかった。

彼女の妹から連絡を受けたあと、片っ端から電話をかけまくった。自分の代わりに会社で待機してくれる人間を探すためだ。せめて今日一日だけでも、という思いがあった。

三連休だから難しいかと思っていたが、子どもが風邪をひいて外出できなくなったという社員が

代わりを引き受けてくれた。夫婦ふたりして看病するよりも休日出勤手当が欲しいという即物的な理由だったが、助かったことは確かだ。万が一手に負えないことが起きたら、いつでも携帯を鳴らしてくれと伝えて会社を出たのは三十分ほど前のことだ。

彼女の配慮だとわかっていても、いざ顔を見たら、もつと早くに言ってくればいろいろ計画も立てられたのに……という思いが込み上げた。自宅にしても、『ぼつたくり』からそんなに離れてはいない。これぐらいの距離なら送ってきたところで大して時間はかからない。むしろ、一緒にいられる時間が延びて嬉しいぐらいなのに……と思ったら悔しくなって、ついついからかってしまったのだ。

「ごめん。君の心配はわかってるけど、もう少し一緒にいたいっていうおれの気持ちもわかってくれると嬉しい」

「……ごめんさぞ」

「ということ、この話はこれで終わり。どこか行きたいところある？」

車に乗るように促しながら、要が質問してきた。

ちよつと考えてみたが、行きたいところなんて思いつかない。要が来てくれるなんて予想もしていなかったのだ。一緒にいられるだけで十分である。

このままずっと車の中に座っていてもいいぐらいです、と呟いた美音の言葉を聞いて、要はにやりと笑った。

「車の中はずっと……なんか誘ってるの？」

その笑いに込められた淫靡な色に気付いて、美音は瞬時に頬を染める。

「そういう意味じゃありません！」

「それは残念。じゃあまあそれは、いずれそのうちに、ということ」

美音は、勘弁してください！　と言いたくなる。譬がそれを聞いたら、きっと『いい年して、何かマトぶつてんのよ！』と笑うだろう。だが、彼氏いない歴絶賛更新中、経験値ほぼゼロの自分にとって、男女関係のハードルはとんでもなく高い。発展家の譬には想像もできないに違いない。知らないことが多すぎると臆病になる。動かない車の中でじつと座ってるなんて、確かに危なすぎる。とにかく行き先を決めなくちゃ……

一生懸命考えてみたが、行きたい場所なんて思いつかない。そもそも休みになる前にも散々考えたけれど、出かけたい場所は図書館とか書店ぐらいいしかなかったのだ。

美音は返事に困り、ついでを見上げてしまった。

「特に行きたいところはない、って感じかな？」

「そう……なりますね」

要はあっさり同意した美音に軽く頷くと、唐突に言った。

「花火は好き？」

「花火……？」

もう十月だということになんで花火の話題が……と美音は疑問に思う。

日本人で花火が大嫌いだという人は珍しい。少なくとも、美音は会ったことがない。

ご多分に漏れず、美音も子どもころから花火は大好きだ。花火が上がっているのを見つけたときは、いつまでもその場に佇み、見つめ続けた。たとえそれがビルの谷間に覗く花火の欠片に過ぎなくても……

けれど、大人になってからはそういう断片的な花火すら見ていない。夜の仕事をしている美音には、花火を見る機会などなかったからだ。

「じゃあ見に行こうよ」

「え……どこに……？」

遊園地のアトラクションですか？ と訊いてみたけれど、そうじゃないと要は否定した。

「競技花火大会って聞いたことある？」

「競技花火……」

「全国の花火師が集まって、自分たちが作った花火を競うんだ」

聞いたことがあるかも……と、美音は必死に記憶を探った。

「えーっと……もしかして、それで来年の花火の注文が決まっちゃうとかいいう？」

「そうそれ」

例年十月はじめの土曜日に北関東のとある町でおこなわれる競技花火大会は、シーズンの終わりを飾るに相応しい、大規模な花火大会だ。

全国の花火師が、この日のために技巧を凝らして作り上げた花火を次々に打ち上げ、その評価を競う。結果がストレートに来年度の売り上げに影響するため、気合いの入りようは半端ではないらしい。

そんな素晴らしい花火大会なので、当然観光客の数もものすごく、近隣のホテルは一年前から予約でいっぱい、当日ともなると会場に続く道は人と車で溢れてしまう。

美音はその花火大会のことはなんとなく知っていたけれど、土曜の夜ということもあって自分がそれを見に行くことなど考えたこともなかった。

「でも……それってもう終わったんじゃない？」

確かその花火大会は十月の第一週に開かれると聞いた。今日は十月八日なのだから既に終わっているはずだった。

「先週の天気、忘れたの？」

そう言われて思い出した。確か、先週の土曜日は大雨だった。

「ちよつとぐらしいの雨ならやるんだけど、さすがに朝からあの雨だし川も増水してるから危険、つてことで延期されて今日になったんだ。見たくない？」

「見たいです！」

でも……と、美音はすぐに顔を曇らせた。

「何？ なんか気になることでもあるの？」

「道も渋滞するだろうし……人出もすごいって聞いたことがあります」

「人混みが苦手なの？」

「それもありませんけど、要さんが疲れちゃうでしょう？」

ここから花火大会のある町まで運転して、さらに人混みに揉まれて花火を見るなんて大変すぎる。今日はなんとかなくても、明日はまた仕事だろうし、連休明けには出張が待っている。花火を見るためだけに、そんなに大変な思いをさせるのは申し訳なさすぎる。

そんな説明をしたあとと美音は、やっぱりもうちよつと人が少なそうなところにしましよう、と提案した。

「大丈夫だよ。今からすぐに出れば、混み始める前に向こうに着ける」

「でも会場だってきつと混んでるし……」

「まあなんとかなるよ。それに、混んでるっていつても阿鼻叫喚あびきょうかんってほどじゃないだろう」

「花火会場で阿鼻叫喚あびきょうかんって……」

あり得ないだろう？ と笑ったあと、要は再度確認した。

「この花火大会は十月の第一週、『ぼったくり』の秋休みは十月の第二週って決まってるんだらう？ 花火が延期になるほどの雨なんて滅多にないし、これを逃したら君が見る機会はもう一生ないかもしれない」

「行きます!!」

そうこなくつちや、と時代がかかった台詞せりふとともに要は車のエンジンをかけた。軽いエンジン音が美音の気持ちさをさらに高揚こつやうさせた。

+

「か……要さん……」

「何？」

「なんで私たち、こんなところにいるんですか？」

「花火を見るためだろう？」

「どーもー」

要の言ったとおり道はまだ混み始めておらず、車は出発してから一時間半ほどで目的地に到着した。開始時間よりかなり前に着いたおかげで、会場近くの駐車場が空いていたのは幸いだった。

川沿いを散歩したりお茶を飲んだりして時間を潰したあと、夕暮れの田んぼ道をゆっくり歩いて会場に向かう。そのころには客足も増え、すっかり花火大会の雰囲気が出来上がっていた。

最初美音は、橋の上から、あるいは打ち上げ会場から少し離れた川原で観覧するのだろうと思っていた。だが、橋を渡り終え、川原に下りていく小道を通り過ぎても要は足を止めなかった。

もうすぐそこは打ち上げ会場というところまで来たとき、要が紐ひものついたIDカードのようなものを渡してきた。言われるままに首にかけ、狭い通路を進んで入場ゲートを潜くぐった先にあったのはなんと棧敷席さきじきせきだった。

特設ステージのすぐ隣に作られたその席では、ひとつひとつの花火の概要やスポンサーを読み上げるナレーターの声がはつきり聞こえ、花火は頭の真上に広がる。

美音は打ち上げ花火というのは目の高さで、遙か遠くに見るものだとばかり思っていた。そのため、花火があまりにも間近に、そして巨大に見えることに仰天、まるで巣で餌を待つ雛ひなのように口がぽかんと開いてしまった。

そしてにわかに疑問がわいてきた。入場にあたってIDカードを要求されるぐらいだから、ここは予め申し込みが必要な席なのだろう。急に予定を決めた要が、なぜそんな席を押さえることができたのだろう……

だが要は、美音の疑問に答えてくれない。

「きれいいじゃない？」

「きれいなんで通り越して、もうすごいとしか……」

花火を打ち上げるドーンという音が身体に響く。花火の一連の流れに合わせて選ばれたBGMもはつきり聞こえてくる。いずれも打ち上げ会場周辺の席でないとは経験できないことだった。

花火の音が大きすぎて、隣にいる要の声すら満足に聞こえない。会話を交わすためには身体を寄せ合わなくてはならず、なんだかくすぐつたいような心地になる。ふたりで寄り添って見上げる花火は、最早この世のものとは思えなかった。

「なんかもう……言葉に困っちゃいますね」

空一面を埋め尽くす大玉の打ち上げ花火や滝のように流れ落ちる仕掛け花火は、まさに火が織りなす芸術だった。秒刻みで形を変えていく花や樹、人気アニメのキャラクターなどに似せて作られる天上絵図は、次はどうなるのだろうという期待を呼び、一瞬たりとも目を離せない。それなのに、隣にいる要の姿も見えていたくて、美音はどっちを向いていいのかわからなくなる。花火を見上げた隣、隣の男に目を走らせたり、忙しいことこの上なかった。

立ち読みサンプルはここまで

ボンサーを続けている関係で、いくつかの席を優先的に押さえることができる。要はそんな席のひとつを割り当てられ、数年前に一度見に来たことがあったのだ。だから初めて見る美音ほどの驚きはない。むしろ隣にいる女を見たい気持ちのほうが大きかった。

今日は朝から職場で事務仕事をしていた。

『ジョッピングプラザ下町』はオープンを二日後に控えて、準備も佳境に入っている。建物に不具合が出たときのために、と会社で待機していたが、問題が起きていなければいい。正直に言えば、会社にいる必要があるかどうかすら疑問だ。

職人ではないのだから、不具合を直しに走れるわけではない。せいぜい職人や必要な部材を手配するのが関の山で、それなら電話で事足りる。どこにしようかと携帯電話さえ持っていれば対応は可能だと思っていた。

それでも、不具合があったときに電話がかかってくるのはたいい会社だし、部材だって大半は会社の倉庫にあるのだから……と上司は言う。やむなく出勤し、溜まっていた書類を片付けていたのだ。

美音の妹から連絡を受けたのは、そんなときだった。

秋休みは今日から三日間という文面のメールを見たとき、要は反射的に壁にかかっていたカレンダーに目をやった。そこには誰かが書いた『競技花火大会』という文字……



要はそんな美音の様子をじっと見ていた。

実はこの棧敷席を押さえるのはけっこう難しい。だが、要が勤める会社が長年この花火大会のス